欧州経済視察団報告書

平成30年10月21日(日)～31日(水)

メッセ・デュッセルドルフ会場にて

平成31年2月

HIROSHIMA KEIZAI DOYUKAI

広島経済同友会

国 際 委 員 会

視察写真集

ライン河対岸のケルン大聖堂をバックに

メッセ・デュッセルドルフ概要説明

デュッセルドルフ市長　表敬訪問

駐ポルトガル日本国大使公邸にて

駐スペイン日本国大使公邸にて

Vortex 社にて

■ 目　　次 ■

• はじめに …… 団長　池田　晃治 …… 1
• 欧州経済視察団名簿 …… 3
• 欧州経済視察団日程 …… 4
• 欧州経済視察所感 …… 副団長　佐々木茂喜 …… 6

《視　察　報　告》

【ドイツ】

メッセ デュッセルドルフ（Glasstec 2018） …… 原田　美穂 …… 7
ジェトロ・デュッセルドルフ …… 髙島恭一郎 …… 10
Digital Innovation Hub Duesseldorf …… 角倉　博志 …… 12
IOX Lab …… 杉之原祥二 …… 14

【スペイン】

Vortex Bladeless社 …… 藤田　洋一 …… 15

《表　敬　訪　問》

デュッセルドルフ市長 …… 藤井　伸一 …… 16
在ポルトガル日本国大使公邸 …… 篠原　敦子 …… 17
在スペイン日本国大使公邸 …… 古川　浩延 …… 19

《所　　感》

【ドイツ】

世界遺産　ケルン大聖堂 …… 佐々木孝富 …… 20
ライン・ルール大都市圏の中心都市デュッセルドルフ …… 佐藤　卓已 …… 22
デュッセルドルフ交通事情 …… 堂本　高義 …… 23
ドイツ食文化 …… 中川　玲子 …… 25

【ポルトガル】

ユーラシア大陸最西端　ロカ岬 …… 狩野　牧人 …… 27
リスボンの世界遺産 …… 前田　　昭 …… 28
リスボン交通事情 …… 榎本　暢之 …… 30

【スペイン】

プラド美術館 …… 貞益　　徹 …… 31
ソフィア王妃芸術センター …… 田村　満則 …… 33
フラメンコとスペイン文化 …… 山根　　近 …… 35
スペイン新幹線 …… 吉田　　豊 …… 37
世界遺産　サグラダファミリア …… 山根以久子 …… 38

【ドバイ首長国連邦】

ドバイ首長国連邦 …… 丸川　眞佳 …… 40
各国の商業施設 …… 沖田　康孝 …… 42
欧州ローカル便　空の旅（デュッセルドルフ～リスボン～マドリッド）… 新山　　創 …… 44

• おわりに …… 副団長　木原　慎二 …… 46

はじめに

広島経済同友会
欧州経済視察団
団長　池　田　晃　治
（㈱広島銀行　代表取締役会長）

当会では、平成30年10月21日（日）から31日（水）の11日間にわたり、ドイツ、ポルトガル、スペイン、ドバイに経済視察団を派遣いたしました。

本視察は、ドイツでのMICE関連などの動向とIndustry4.0やスタートアップ支援に関する動き、ポルトガル、スペインの観光振興などの状況、さらには中東屈指の金融センターであり、世界的な観光都市でもあるドバイの現状などを把握し、我々の活動テーマである「広島の未来を『創る』～しごと・ひと・まちの好循環を目指して～」に資することを目的として実施しました。

最初の訪問地、ドイツのデュッセルドルフでは、世界有数の国際見本市会場であるメッセ・デュッセルドルフで開催中の、Glasstec 2018（国際ガラス製造・加工機材展）を視察することができました。まずその規模の大きさに眼を見張りましたが、何より出展者、来場者ともイベントとしてではなく、商談、交渉といったまさにビジネスの場として真剣に捉えて参加しており、我々が目指すべき国際見本市の方向性を見たような気がしました。また、スタートアップについてもデジタル・イノベーション・ハブを拠点とした機能的かつ能動的な官民一体となった手厚い支援体制が構築されており、日本と比べてもその充実振りに感心しました。

続いて訪問したポルトガル、スペインは、悠久の歴史に育まれた素晴らしい文化や芸術を誇る観光立国ですが、直接こうした異文化に触れることで、右脳が刺激され感性が豊かになり、様々な感動が生まれるということを改めて身を以って体験しました。翻って日本は、訪日外国人観光客の右脳をしっかり刺激できているのかどうか考えさせられました。またスペインは、自動車生産台数が欧州ではドイツに次いで第２位と産業・技術においても高い国際競争力を有していることや、スタートアップ支援にも積極的に取り組んでいることなど、観光だけに頼らない工業立国としての力強さも感じました。なお個人的には、視察の合間の休日に訪れたマドリッドの国立ソフィア王妃芸術センターで、念願であったピカソのゲルニカを鑑賞できたことも大変良い思い出となりました。

最後の訪問地ドバイは、金融･観光都市としての顔の他、近年は経済特区（フリーゾーン）やドバイ国際空港を活用したハブ都市としての機能強化を進めています。わずか１日の滞在でしたが、それまでの訪問地と打って変わって近未来的なビルが林立し、そのモダンでスタイリッシュな都市空間が印象的でした。

それぞれの視察先や交流会などの詳しい状況は、各団員の報告をご覧いただくこととして、団長としては団員の皆様のご協力により、無事に視察日程を終えることができ、安堵いたしております。また、我々が日頃から認識している課題を幅広く網羅した視察内容でしたので、今後の同友会活動に大いに反映されることを期待しております。

結びにあたりまして、ご参加いただいた団員各位、視察先の手配などお世話をいただいた国際委員会の皆様及び関係者の方々に対し心より感謝申し上げます。

欧州経済視察団　名簿

（団　長）

池　田　晃　治	株式会社広島銀行	代表取締役会長

（副団長）

佐々木　茂　喜	オタフクホールディングス株式会社	代表取締役社長
木　原　慎　二	株式会社中国新聞社	取締役営業本部長

（団　員）

榎　本　暢　之	有限会社エノモト	代表取締役
沖　田　康　孝	広島ガス株式会社	執行役員営業計画部長
狩　野　牧　人	有限会社トッツ	代表取締役
佐々木　孝　富	オタフクホールディングス株式会社	専務取締役
貞　益　　徹	丸紅株式会社中国支社	支社長
佐　藤　卓　己	株式会社サンエス	代表取締役社長
篠　原　敦　子	株式会社合同総研	代表取締役
杉之原　祥　二	マナック株式会社	代表取締役会長
角　倉　博　志	一般財団法人ひろぎん経済研究所	理事長
髙　島　恭一郎	住友商事株式会社中国支社	支社長
田　村　満　則	ヒロコンフーズ株式会社	代表取締役社長
堂　本　高　義	堂本食品株式会社	代表取締役
中　川　玲　子	社会保険労務士法人SaLac	代表
原　田　美　穂	株式会社パルウェーブ	代表取締役社長
藤　井　伸　一	三井物産株式会社中国支社	支社長
藤　田　洋　一	伊藤忠商事株式会社中四国支社	支社長
古　川　浩　延	ゲイソー・ロジスティクス株式会社	代表取締役社長
前　田　　昭	株式会社広島銀行	取締役常務執行役員
丸　川　眞　佳	株式会社アートテレビ	代表取締役
山　根　以久子	株式会社サンポール	代表取締役
山　根　　近	久福汽船株式会社	代表取締役
吉　田　　豊	白井汽船株式会社	代表取締役社長
新　山　　創	株式会社中国新聞社	経済部記者
谷　田　健　一	広島経済同友会	事務局長

■ 日　程　表 ■

日数	月日・曜日	都　市	時間	便名	行　　程
1	2018年 10月21日 日曜日	広島空港 羽田空港	19：30 20：55	NH686 構内バス	全日空機で東京羽田へ 国際線ターミナルへ移動 機内(泊)
2	10月22日 月曜日	羽田空港 ドバイ空港 ドバイ空港 デュッセルドルフ空港 ケルン	0：30 6：45 8：30 13：25	EK313 EK055 専用バス	エミレーツ航空機でドバイへ(10時間５分) エミレーツ航空機でデュッセルドルフへ (６時間55分) 入国審査 **【観光】**ケルン大聖堂 ケルン(泊)
3	10月23日 火曜日	ケルン デュッセルドルフ ケルン	 10：00 13：00 15：30	 専用バス	 **【視察】**メッセ・デュッセルドルフ(10：00～12：00) グラステック 2018展示会視察 **【表敬訪問】**市庁舎　トーマス・ガイゼル デュッセルドルフ市長 **【視察】**ジェトロ・デュッセルドルフ事務所 ケルン(泊)
4	10月24日 水曜日	ケルン デュッセルドルフ デュッセルドルフ空港 リスボン空港	 9：00 15：55 18：00	 専用バス EW9602	 **【視察】**digihub デュッセルドルフ **【視察】**IOX Lab及び、CumuloCity ユーロウィングス航空機でリスボンへ (３時間05分) **【夕食】**ファド・レストラン リスボン(泊)
5	10月25日 木曜日	リスボン	9：00 13：00 18：30	 専用バス	**【観光】**ユーラシア大陸最西端ロカ岬、シントラ王宮、リベイラ市場 **【観光】**ジェロニモス修道院、ベレンの塔、ケーブルカー体験 **【表敬訪問】**在ポルトガル日本国大使公邸 リスボン(泊)
6	10月26日 金曜日	リスボン空港 マドリード空港 マドリード	9：10 11：25 15：00 19：00	TP1016 専用バス	ポルトガル国営航空機でマドリードへ (１時間15分) **【視察】**Vortex Bladeless社 **【表敬訪問】**在スペイン日本国大使公邸 マドリード(泊)
7	10月27日 土曜日	マドリード	終日	専用バス	**【観光】**ソフィア王妃芸術センター、プラド美術館 サン・ミゲル市場等 **【夕食】**フラメンコ・レストラン マドリード(泊)
8	10月28日 日曜日	マドリード駅　発 バルセロナ駅　着 バルセロナ	9：30 12：34 14：30	AVE03093 専用バス	スペイン新幹線でバルセロナへ **【観光】**聖家族教会、カサ・ミラ、グラシア通り、グエル公園等 バルセロナ(泊)

9	10月29日 月曜日	バルセロナ バルセロナ空港 ドバイ空港	 14：50 0：35	 EK186 専用バス	 エミレーツ航空機でドバイへ（6時間45分） ホテルへ ドバイ（泊）
10	10月30日 火曜日	ドバイ	終日	専用バス	**【観光】**ゴールドスーク、スパイススーク、ジュメイラモスク、ジュメイラビーチ、アブラ（小船）乗船、ドバイ博物館、バスタキア地区、ドバイモール等 夕食後、空港へ 機内（泊）
11	10月31日 水曜日	ドバイ空港 関西空港 関西空港駅 新大阪駅 新大阪駅 広島駅	3：05 16：55 17：46 18：32 19：05 20：26	EK316 はるか44 のぞみ49 	エミレーツ航空機で大阪へ（8時間50分） 特急で新大阪へ 新幹線で広島へ

【所　感】欧州経済視察

広島経済同友会
欧州経済視察団
副団長　佐々木　茂　喜
（オタフクホールディングス㈱代表取締役社長）

EU（欧州連合）この28の国からなる政治・経済統合体は（2017年）

面積　　429万㎢　（日本の約11倍）
総人口　5億1,246万人　（日本の約4倍）
GDP　　17兆3,254億ドル　（日本の約4倍）

小生はこの程度の知識でヨーロッパの３カ国とドバイを訪れたが、数値データによる事前の定量情報よりも、現地で五感により得られる定性情報の大切さを、痛感した視察であった。

最初に今回の視察日程が、11日間で４カ国を訪問すると知った際には、足早に表面だけをトレースするのではとの思いがあった。実際には短期間のうちに４カ国を巡ることで、逆に各国の特長やその相違点を鮮明に知ることが出来た。

特にEUでは多くの国が陸続きで接する中、各国がその独自性を模索し、差別化を図っている姿が印象的だった。

ドイツ連邦はGDP世界４位、EUの中で最大の経済力を持つ。隣接する国が９カ国もあり、その地の利を生かして世界有数のメッセ産業が発達している。また比較的平野の多い、地政学的に優劣の少ない国土のためか、連邦制度のもと各州が一定の権限と独自の法制度を有している。日本と比べて地方分権が格段に進んでいると感じた。そのような環境ゆえに、今回視察したスタートアップ支援やインキュベーション施設の細やかな対応が可能と思われた。

ポルトガルはEU最西端で人口1,064万人の国ながら、海外からの年間観光客が自国の人口以上の年間1,200万人を超え、その観光関連の収入はDGPの10％を占める。歴史的建造物や街並み、食文化等、総力を挙げて観光産業へ取り組んでいる。英語圏からの観光客が多いため、国民に英語を馴染ませるために、テレビや映画の音声翻訳が、法律で禁止されている徹底ぶりには驚かされた。

スペインは、世界でも有数の美術館や多くのガウディ建築に象徴されるように観光立国のイメージが強いが、人口・GDPともEU第５位の経済力を持ち、自動車生産に関してはドイツに次いでEU第２位は意外であった。まさに文武両立の国であった。

ドバイは２回目の訪問であったが、あくまでも私見として「砂上の楼閣」「バベルの塔」の感が否めなかった。10年前の訪問時に比べると、地元の市場や従来の観光地が寂れ、超高層建造物や、新設の巨大ショッピングモールばかりが目立った。実際、彼の地では石油産出国の富豪と中国の富裕層の人達が多く見られたが、その動向と行く末にも興味をもった。

近年の日本では、インバウンドが急増している中、2020年の東京オリンピック、2025年の大阪万博開催が決定し、その勢いには更なる加速が予想される。元々インバウンドが増加した「円安」「LCC」「ビザ緩和」の要素は単なるきっかけであって、真の訪日理由を一番把握していないのは実は日本人なのかも知れない。2030年には6,000万人もの第二の黒船到来が予想されている中、今こそ日本に必要なのは『彼を知り、己を知り、地の利を知る』ことではないのかと考えさせられた視察であった。

■ 【視　察】メッセ・デュッセルドルフ（Glasstec 2018）

～ 世界最大のガラス産業見本市 ～

原　田　美　穂
㈱パルウェーブ
代表取締役社長

ドイツのデュッセルドルフで開催されていた世界最大のガラス産業のメッセ「Glasstec 2018（グラステック）」を視察した。

最初に「メッセ・デュッセルドルフ」のミヒャエル・デーゲン取締役からグループの事業概要について、ご説明をいただいた。

メッセは、ドイツの中小企業にとって重要なビジネスチャンスの場となっている。ドイツも日本と同様に中小企業が経済の中心であるため、ドイツ経済活動の中心はメッセといっても過言ではないようだ。

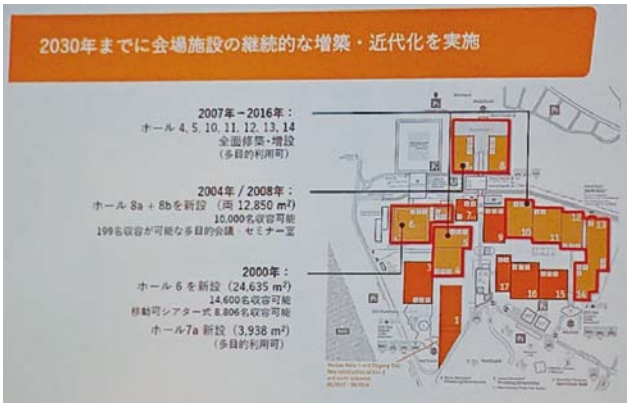
ドイツにおけるメッセは、日本のメッセとは大きく異なっていた。

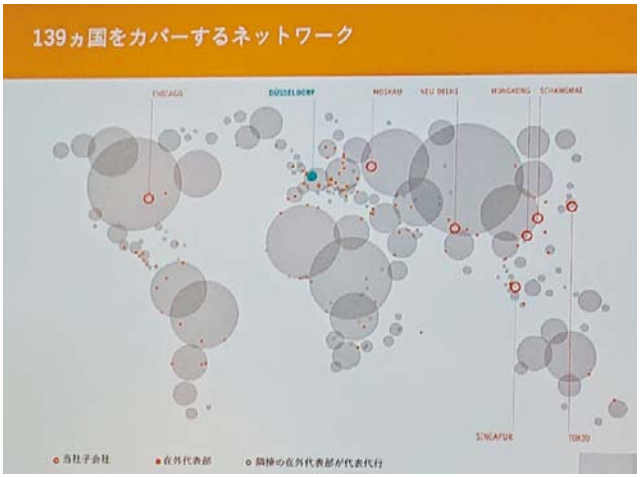
日本のメッセでは、参加する企業も参加者も一般的な情報収集を目的とすることが多く、お祭り的なイベントと思われがちで、ビジネスに直接結びつけにくいという印象だが、ドイツのメッセではBtoBでのビジネスが基本。実際にビジネスに結び付けることを目的にしている。一般客で情報収集に訪れる人を拒否する出展社もあると言われるほど、メッセで真剣にビジネスをしようとされているのだと感じた。

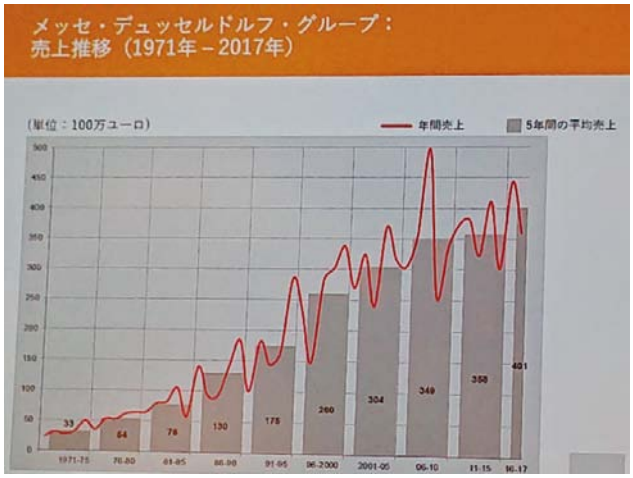
メッセの規模も、総展示面積は約30万平方メートルでビックサイトと幕張メッセを足したものよりも広く、その違いを実感した。

これだけの規模で行われるメッセである。メッセの開催期間中は町が変わると云われている。開催期間中はホテルの宿泊料金も２倍となり、タクシーも捕まらないそうだ。それだけではなく飲食や物流にも影響する。ドイツでは、メッセをひとつの産業ととらえているほどの経済効果だということだった。現に当視察のドイツでの宿泊先もデュッセルドルフでは、メッセ開催期間中は３連泊以上で宿泊依頼しないと予約できないということで、私達もケルンに宿泊することになったようだ。

また、メッセ・デュッセルドルフは、国際色豊かで、2017年は29回開催されているが、出展社は28,700社、そのうち国外からは20,500社、来場者も1,350,000名のうち国外からは496,102名。機械・機器・プラント分野の主催メッセでは、国外からの出展社74%、国外からの来場者は73%と国際色豊かとなっている。これが、出展社や来場者を集める大きな要因になっている。







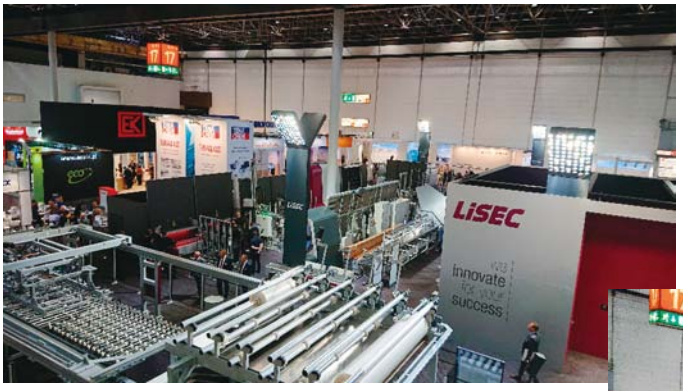
メッセ・デュッセルドルフは、世界各国にネットワークを構築している。

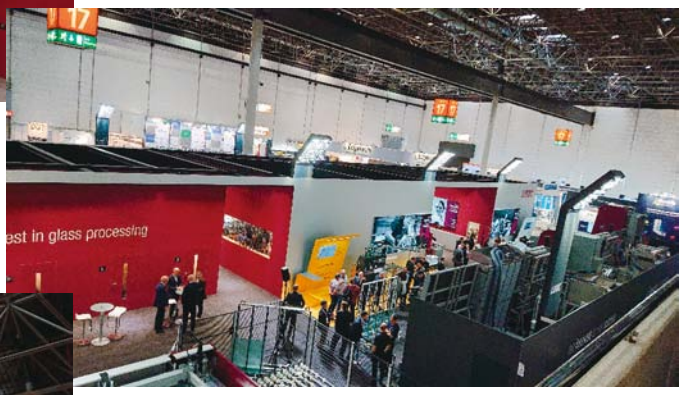
メッセ･デュッセルドルフの７つの子会社と73の在外代表部が、世界139カ国をカバーし、ビジネスの入り口としての役割を果している。

この視察で、メッセがひとつのビジネスとして成立していること。日本とは違ってメッセによってビジネスが広がっていることを知ることができたことは大きな収穫だった。

Glasstec 2018　国際ガラス製造・加工機材展

会期：2018年10月23日(火)～26日(金)9時～18時
開催周期：隔年
会場：デュッセルドルフ見本市会場　ホール９～17号館（＋屋外展示スペース）
主催：メッセ・デュッセルドルフ（Messe Düsseldorf GmbH）
後援：ドイツ連邦ガラス工芸協会（Bundesinnungsverband des Glashandwerks）
　　ドイツ連邦ガラス産業協会（Bundesverband Glasindustrie e.V.）
　　ドイツ機械工業連盟 ガラス技術フォーラム（VDMA Forum Glastechnik）
＜出展対象製品・技術・サービス＞：1,357
　　ガラス製造機械・技術、ガラス加工・仕上げ、ガラス製品・応用、工具、代替・予備・付属部品、測定・駆動・検査・制御技術、ソフトウェア、研究開発、各種サービス　など
＜出展社＞50か国から出展：日本からは12社出展
　　主な参加国　ドイツ（376）中国（307）イタリア（174）米国（57）イギリスと北アイルランド（51）フランス（40）トルコ（39）ベルギー（34）オランダ（32）スペイン（30）
＜前売入場券（窓口）＞1€＝130円
　　１日券6,890円（53€）、２日券9,880円（76€）、４日券14,300円（110€）





メッセ・デュッセルドルフ（Messe Düsseldorf）（ドイツ本社）
＜会社名＞Messe Düsseldorf GmbH＜創立＞1947年
＜住所＞Messeplatz 140474 Düsseldorf / Germany
＜主要見本市＞機械・装備、商業・サービス、ファッション・ライフスタイル、レジャー
＜従業員＞約1,200名（グループ全体）　＜展示面積＞約306,000m^2（19ホール）
＜株主＞：デュッセルドルフ市56.50%　土地管理会社デュッセルドルフライスホルツ20%
ノルトライン・ウェストファレン州20%　商工会議所1.75%　手工業会議所1.75%
※メッセ･デュッセルドルフは1947年以来、メッセを開発し、企画し、運営してきました。今は、５つの産業分野に集中して世界中でメッセを開催。

■ 【視　察】JETRO Dusseldorf

髙　島　恭一郎
住友商事㈱中国支社
支社長

今回の海外視察の最初の企業訪問はJETRO Dusseldorfであった。 自分自身はほぼ４年振りのドイツ訪問であったが、途上国にはよく見られる道路脇の落書きが増えていること、また幹線道路にも大道芸人が出現していることには些か驚いた。ドイツ在10年以上の通訳士によれば、難民が増えたここ３年でその傾向が強くなっているという。

国内外の諸問題を抱えているドイツの現状に関し、JETRO Dusseldorf渡邉所長よりの講義をもとに以下の通り整理してみたい。

（ドイツ基本情報）

・面積　36万km^{2}c弱（日本の約94%）
・人口　8.2千万人強（日本の約64%）
・宗教　カトリック、プロテスタント、ユダヤ教
・９か国と国境を接する。
・100万都市は4つのみ。
　～ ベルリン352万人/ハンブルグ140万人/
　　ミュンヘン120万人/ケルン100万人

（経済情勢）

・GDP成長率は２%前後と堅調、消費者物価上昇率も同レベル。
　また失業率は独基準では約５％であるが他国基準では３％であり、欧州他国と比して経済は安定している。公共投資は百数十万人に達する難民に対するものが増えている。
・ドイツは日本と同様資源が少なく、輸出超の貿易国。うち約50%は機械及び輸送機器。
　国別でみれば、対米国が最大（8.7%）、２位はフランス（8.2%）。
　輸入の１位は中国（9.7%）、２位はオランダ（8.8%）。
・対日貿易では、輸出も輸入も乗用車がNo.1（輸出は約25%、輸入は約10%）。
　輸出の２位は医薬品関連（約13%）、輸入の２位は電気機器関連（約７％）となっている。
・GDPの70％が南、西地域に集中。また上位５州で約70％を占め、地域差が拡大している。

（日系企業の動向）

・欧州内での進出先は1,814社で最高、２位は英国で986社（@2017年10月）。
　最近はM＆Aによる進出が増えている。
・また、欧州進出日系企業の販売先としてもドイ

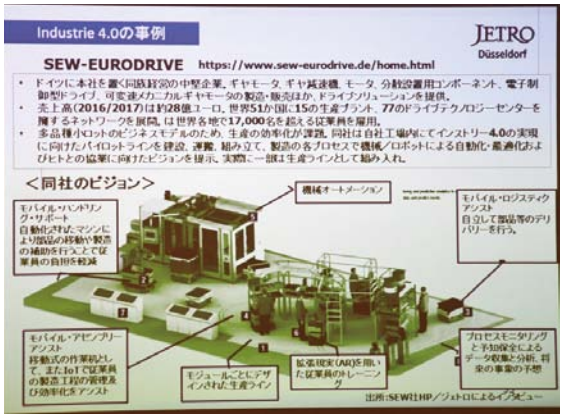
ツはNo.1となっている。
（２位群はトルコ、ポーランド、ロシア）

・進出日系企業が直面している最大のものが「人材の確保」（失業率が低いのも要因）。
その他最近では「労働コストの高さ」も顕著となっている。

（日・EU EPA）

・本年７月に締結、来年早々の発効が期待される。
GDPを0.99%（約5.2兆円）押し上げ、労働は0.45%（29.2万人）増加。
・対日本市場；
農林水産品について米は除外を確保。麦・乳製品、豚肉についても基本制度を維持。
工業製品については100%関税撤廃。EPA発効時点で、無税割合が77.3%から96.2%に即上昇。
・対EU市場；
農林水産品については、ほぼ全ての品目で関税撤廃を獲得（かつ、ほとんどが即時）。
全ての酒類の関税も即時撤廃。
工業製品については、100%の関税撤廃を達成。EPA発効時点で無税割合が38.5%から81.7%に上昇。乗用車（現行税率10%）は８年目に関税撤廃。自動車部品は92.1%が即時撤廃。カラーテレビ（現行14%）は６年目に撤廃。

（Industrie 4.0）



・第一次・軽工業（機械化）、第二次・重化学工業（電気・石油）、第三次・エネルギー（自動化）に続き、第四次産業革命として「インターネットによる産業のデジタル化」を推進。
①製品輸出および製品技術輸出のデュアル戦略（ドイツの生産拠点としての競争力を確保し続ける.）
②インターネットとセンサーを駆使、ネットワーク化した「スマート・ファクトリー」構築
③データ・センシングを通じて蓄積される情報を、生産プロセスの最適化に活用
④労働の高度化、省エネルギー、高効率化
・産学官連携するIoT推進機関「Plattform Industrie 4.0」が主導。
国による「トップダウン型」。執行役員メンバーには労働組合も入る。
・地域別に見ると、南ドイツ２州（バイエルン州、バーデン・ヴュルテンブルク州）およびNRW州の集積が多い。
南ドイツには機械、自動車メーカーが多く、NRW州は先端クラスター It's OWLが存在。
・2016年の市場予測は48.5億ユーロ、2017年以降も20%以上の成長。
セグメントの最大はITサービス（61%）、その需要が最も大きいのは機械・設備業界（23.2%）、次にエレクトロニクス（21.9%）、自動車（20.1%）。
・導入への障壁としては、最大のものが高い投資費用であり、また専門知識を持った従業員の不足も指摘されている。
但し、54%の企業が２年以内で投資が回収できるとしている。
従業員100名以上のドイツ企業557社の調査結果として、全体の64%が導入中または導入予定としている。（うち、自動車製造会社の数が最大となっている。）

（ドイツ　中堅・中小企業の特徴）

① 差別化された製品に特化（ニッチ分野でリーダー的地位を確保）
② ブランド・品質を重視（価格よりも製品の品質、ブランドで勝負）
③ 長期的視点 （家族経営、株式上場せず長期的な研究開発、人材育成）
④ 地方へ分散（国内各地に分散、中小企業同士の補完関係）

2016年、日独経産省の次官級で「IoT・インダストリー4.0協力に関する共同声明」を締結し、2017年には閣僚級に格上げされている。

日独連携によるIndustrie 4.0の推進が期待される。

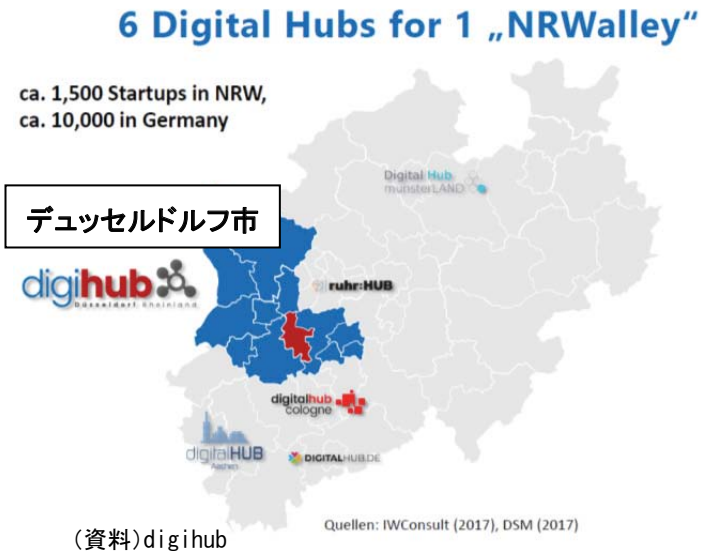
■ 【視　察】Digital Innovation Hub Düsseldorf　Rheinland GmbH

デジタル　イノベーションハブ　デュッセルドルフ

角　倉　博　志
（一財）ひろぎん経済研究所
理事長

（施設概要）

同社は、2016年にドイツのNRW州（ノルトライン・ウェストファーレン州：人口約18百万人）が、州内に位置するアーヘン、ボン、ケルン、ミュンスターラント、エッセン・ルール地域など6つの都市・地域に、デジタル産業におけるイノベーションを創出する目的で設置した、地方政府の主導によるスタートアップ企業の支援施設のひとつである。



（資料）digihub

NRW 州とデュッセルドルフ市

（創業支援の取組み状況）

特に、2015年にデュッセルドルフ市長が「新しいテクノロジーによるイノベーションが市の発展のために大切」として、スタートアップ支援を選挙公約にして運営に注力していることもあり、デュッセルドルフ市（人口約61万人）は、州内で最もデジタル化の推進、スタートアップ支援に力を入れている都市のひとつとなっている。

経営に関するコーチングやピッチイベントの開催、隣接するコワーキングスペースの提供などに加え、既存のスタートアップ企業、地元の工科大学、民間企業などによって、創業間もない経営者から

成る５～６人の少人数クラスを４～５か月指導するプログラムなどによる支援を行っている。成長したスタートアップ企業が新たなスタートアップ企業を支援する好循環が生まれており、ここで成長した企業がさらなるスタートアップ企業を生み出す財産となっている。さらに、アクセレレーターとして５分間のピッチイベント活動を積極的に展開しており、これまでのビジネスマッチングの実績は9,300件以上に上る。

デュッセルドルフ市におけるスタートアップ企業数も、2015年の135社から2016年には251社、2018年には298社に増え、2017年には24社がリスクキャピタルを得ている。資金調達の総額は48百万ユーロ（約62億円）で、そのうちの９社は１百万ユーロ（約１億３千万円）以上の資金調達を行った。

2018年に続き2019年２月７日にデュッセルドルフ市で開催される「Impressions Digital Demo Day 2019」には国内100社、海外25社のスタートアップ企業が参加し、仮想現実（VR）、ドローン、スマート機器、ロボット、IoT、サイバーセキュリティなどにおける最新のイノベーションの現況を発表する予定である。なお、来場者数は2,500人の見込み。今回の視察に参加されたある同友会会員企業さんも、来年のこのイベントに社員を派遣する予定との事であった。

同社の形態はドイツ法における有限会社で、出資は地方政府と地方都市が主体となっており、50％が州政府、25％がデュッセルドルフ市、25％がコメルツ銀行系の民間企業などである。同社が入居するビルはデュッセルドルフ市の所有であるが、それをSTARTPLATZというシリコンバレーで創業経験のある経営者が立ち上げた民間企業が賃借し運営しており、STARTPLATZ自身もここでスタートアップ企業の支援を行っている。

説明会場にて

いくつかのドイツの大手企業もこの拠点に入居し、スタートアップ企業のビジネスモデルや技術の情報を集め、協業の可能性を常に探っているとのことであった。

市政府と上級政府との連携、首長のリーダーシップ、施設に市内のスタートアップ企業を集約、既存のスタートアップ企業が新たなスタートアップ企業を指導、デジタルイノベーションの創出を目的としたことなどが、これまでの成果を生み出したポイントであると感じた。今後の我々の創業支援の活動と報告にも是非、生かして参りたい。

■ 【視　察】IOX lab 社

～ 納期30日を明言 ～

杉之原　祥　二
マナック㈱
取締役会長

ドイツ・デュッセルドルフ視察２日目、スタートアップ企業を支援する施設digihubを訪問し、説明を聞いた後、同施設の中に入居しているワークショップのIOX LAB社を視察した。

同社は、スタートアップ企業や大手企業から持ち込まれたアィデァをプロトタイプにするということにこだわって起業支援を行っている技術者集団である。テクノロジーから新しいビジネスを創造し、市場への進出戦略までの支援活動を行っている。

早く目に見える形にすることをセールス・ポイントとしているため、「まずは依頼からプロトタイプ作成までを30日でやると明言する」と強調していた。

対象の製品は小型のもので、人体ロボットやセンサー付き蚊取り器の説明があった。

2015年の設立で、社員は電子・電気関係の若手技術者20名、売上高は順調に伸びていて100万ユーロ（年）ということであったが、この会社自体がまだまだスタートアップ段階という印象を持った。

続いて、この施設には入居していないが、この施設の仲間が集まって企業したsoftware CumuloCityの説明があった。

なお、近くにホテル・ネット仲介のトリバゴ社があったのが印象に残った。

■ 【視　察】Vortex Bladeless 社

～ 羽の無い風力発電装置を開発 ～

藤　田　洋　一
伊藤忠商事㈱中四国支社
支社長

スペインJETROさんのご紹介で、マドリッド郊外にあるVortex Bladeless社を訪問、ここは「羽の無い風力発電」を開発中のベンチャー企業。創業者のDavid J. Yanez氏は、タコマのつり橋が、それほど強くもない風に煽られて大きく波打つのを見て思い付いたと言う。４年前に同じcoCEOのMr. Raul Martinと２人で始めたこの会社も現在はスタッフ10名を抱え、鳥に優しい簡単なメンテナンス、軽量で静粛、長い寿命、省スペースを謳い文句に、小さな携帯充電用や高さ2.75メートルの一般家庭用の風力発電装置を開発している。見た目は玩具のロケットの様な円筒形の装置。既に６つの特許を取得し、個人投資家やEUからの支援を受け、又クラウドファンディングを使って資金を調達している。

創業者の
Mr.David J.Yanez（coCEO）

2.75メートルのタイプを商品化し、早ければ年内、遅くとも来年初の販売開始を目指し、これを千台販売するのが当面の目標。まだあくまで実験段階での数字ではあるが、2.75メートルのタイプで風速４メートルから発電が可能で、最適風速は９メートルで100ワットを発電、メンテナンス費用等のランニング・コストも加えた総発電コストは従来の風力発電より40％安くなると言う。3Dプリンターを使い製造、炭素繊維で補強する等、上部の軽量化が開発のポイント。円筒形なので、従来の風力発電と違い、風向きに左右されないのが大きな特徴。内部にある磁石とコイルを使って発電するが、詳しい構造に就いては非開示としている。

10の強み

大がかりで環境への影響も懸念される従来型と比較し、極めてシンプルで手軽な商品と言えるが、商品化にはまだまだ紆余曲折がありそう。私はこの種の製品に関わる専門知識を持ち合わせておらず、極めて感覚的な感想だが、再生可能エネルギー発電の常識を覆すような画期的な発明になるかと言えば疑問は残るが、街灯用ソーラー発電の代替品、或いは家庭用ソーラー発電を補完する商品にはなり得るかも知れない。個人的には、本商品の開発の成否そのものと言うより、むしろ、EUからの支援等、こうしたベンチャー企業を４年に亘って支援する環境が整備されている事に、これからの参考とすべき事が示唆されているように感じた。

実験中の「羽の無い風力発電」

■ 【表敬訪問】デュッセルドルフ市長

～ トーマス・ガイゼル上級市長 ～

藤　井　伸　一
三井物産㈱中国支社
支社長

10月23日、ライン川近くにそびえる巨大なメッセ（見本市）で世界最大のガラス産業の展示会「グラスメッセ」を視察した後、歴史的建造物の中にあるデュッセルドルフ市役所にトーマス・ガイゼル上級市長を表敬訪問した。

ドイツ人としては小柄ながら、非常にエネルギッシュなガイゼル市長からは、同友会視察団の来訪を歓迎する旨の日本語のメッセージに続けて、欧州の視察先としてドイツを選んでくれたこと、又同氏が長年に亘り力を入れて来たMICE（Meeting、Incentive tour、Conference、Exhibitionの頭文字をとった造語、ビジネストラベルの一つの形態）の誘致に関心を示したことに対し感謝の言葉があった。

そして、メッセ・デュッセルドルフ（売上443百万ユーロで世界第４位）は世界から人々惹き付ける磁石のような存在であり、デュッセルドルフに就いて発信し広く知らしめる存在であり、非常に大きな意味を持っているとの説明があった。

日本との関わりについては、406もの日本企業が進出している旨、紹介あり。今後はデュッセルドルフ、広島、ジェトロの３者の関係の発展に期待を込めるコメントが続いた。

デュッセルドルフ市庁舎

正副団長、市長、渡邉ジェトロ所長記念写真

ドイツが提唱している「インダストリー4.0」に就いては、産業のデジタル化は日独双方にとって極めて重要な課題であるとした上で、デュッセルドルフの取組みとして今回の視察先であるデジハブハブ、IOXの紹介があった。

トーマス・ガイゼルデュッセルドルフ市長

最後に2019年９月に東京のホテルニューオータニでデュッセルドルフとしてイベントを開催すること、是非そのイベントには広島からも来訪してもらいたいとの期待表明を以て、歓迎スピーチを締めくくられた。

これに対し、視察団団長の池田代表幹事より返礼の挨拶あり。訪問受け入れへの感謝の言葉に続けて、①広島経済同友会は1956年に設立された62年の歴史を持つ経済団体であること、②現在の会員数は869名を数え全国44の同友会の中でも東京、名古屋に次ぐ３番目の規模を誇る同友会であること、更に③同友会には２つの部会と８つの委員会があり、夫々にテーマを掲げて広島県経済の発展の為に活動、特に今年度は広島の未来を創る「しごと・ひと・まち」の好循環を目指して汗を流している旨、紹介あった。

広島美術館所蔵品図録の贈呈

お土産はもみじ饅頭等です。

池田筆頭代表幹事からは、更にドイツは産業のパラダイムシフトとも言えるインダストリー4.0を世界に先駆け標榜、その実現に向け戦略的な施策を推進しているが、なかでもデュッセルドルフは次世代産業の育成を視野にスタートアップ企業の支援等先頭を走っており、有数の誘致実績を上げているメッセ含めて、その実情を確り視察、エッセンスを学んだ上で、広島県の発展の為のヒントを持ち帰りたいと、今回の視察の持つ意義や目的に就いて説明あった。

トーマス・ガイゼル市長と池田代表幹事

面談は終始極めて和やかな雰囲気の中で進行、広島経済同友会にとって初のデュッセルドルフ訪問であったが、同市の多年に亘るMICE誘致への取組み姿勢や次世代を担う産業の育成に向けた強い意志を確認できたことから、広島のこの先の成長を考える上で非常に良い刺激を得る機会になったものと考える。

■ 【表敬訪問】在ポルトガル日本国大使公邸

篠　原　敦　子
㈱合同総研
代表取締役

リスボンの郊外、小高い丘の閑静な高級住宅街の一角に、大使公邸は佇んでいる。

青と白のタイルでデザインされたエントランスを進むとドアの横には菊の御紋。ここで日本を代表して任務が営まれているのだと実感しました。バルコニーからはプール付の青々とした庭園が広がり、その先には刻々と夕日に染められていくリスボンの街並みが見渡せる。

夕闇迫る頃、新美潤特命全権大使の歓迎のご挨拶で会はスタートした。大使は、横浜ご出身でDNAのファンでいらっしゃるにも拘らず、いきなりカープのセリーグ優勝のお祝いを言って頂き会場は一気に和やかなムードとなった。イラン、ロシアを歴任されてのポルトガル大使ご就任だそうである。

池田視察団長からは､広島経済同友会の現状とポルトガル視察の目的「観光立国に学ぶ」について、さらには「広島・長崎原爆展」のリスボンでの開催についての謝辞が述べられた。

続いて大使から最近のポルトガル情勢と日本との関係、また、観光への取り組みについてご説明して頂いた。2015年に就任したコスタ首相は事務能力に長けた人で､経済発展（実質GDP成長率2.7％）と政治をうまく両立させ安定的に政権運営されているそうだ。EUとは積極的に協力体制を築き、米国との関係も良好。2019年２月には世界最大級のWebサミットが開催さる。そう言えば、昼間通りがかった大きな公園には開催予定の看板が掲げられていた。

治安は凶悪犯も少なくテロもないが、難民受け入れもあって街中ではスリに用心が必要だ。日本との関係は皆さんご存じの通り歴史的な結びつきは強く、日本からの観光客もこの４～５年で倍増している。マツダスタジアム10周年で開催された傘祭りは、松田オーナーがポルトガルのお祭りにヒントを得て実現されたそうである。

観光施策としては、ホテルの整備に力を入れ、コサーラというお城のホテルが各地で開業されている。最も特筆すべきことは、英語教育の徹底実施だ。子供の頃から英語を身近なものにするため、英語版の映画やドラマはテレビ放映であっても吹き替えなしの字幕のみだそうである。インバウンドには英語が欠かせないということを改めて突きつけられたような気がした。

日本から同行されたシェフによるお料理のおもてなしに舌鼓を打ち、各テーブルで大使や書記官との話が盛り上がった後､佐々木副団長の謝辞で懇談会はお開きとなった。

■ 【表敬訪問】在スペイン日本国大使公邸

古　川　浩　延
ゲイソー・ロジスティクス㈱
代表取締役社長

広島経済同友会で毎年恒例となっている経済ミッションに今年も参加した。今回は激動する世界情勢を背景に英国のEU離脱、フランスの政情不安等で揺れる中、ドイツ・ポルトガル・スペイン、そしてアラブ首長国連邦各国への視察団派遣となった。

本稿では、担当となった10月26日訪問のスペインの首都マドリードにある在スペイン日本国大使公邸への表敬並びに夕食会について報告する。

大使公邸では、水上正史特命全権大使の他大使館スタッフの皆様のお出迎えを受け、初めにご当地スペインの概況について大使自らレクチャー頂いた後、美味しい日本食を主体とした夕食会を頂きながら和やかに懇談と有意義な席であった。先ずは水上大使から伺った内容の一部を順不同でまとめてみたい。

- 冒頭「フラメンコと闘牛だけではない欧州の大国スペイン」の概況について、スペインの大きな国旗を会場前方に広げさせた上で、その由来の解説から始まり、臨場感あふれる口調で熱く語っていただいた。水上大使は、ご自身外務省入省後早い機会に２年間の語学研修で現地を実体験されているだけあって、大変分かり易く説得力のある内容に大きな感銘を受けた。
- 日本にいるとなかなか実感の湧かないスペイン語を通じた大きな影響力～15世紀に始まる大航海時代からの世界進出の功績を考えれば、中南米やアジアを中心に現在のスペイン語圏人口が５億人にも及ぶ実態は目を見張るものがある。
- 日本ではEUと聞いて、自分を含め一般の人は直ぐにはイベリア半島を思い浮かべないが、スペインは長い間欧州の一員に加わりたいと大きな努力を続けてきたとの指摘があり、実際現在のサンチェス政権も欧州重視の基本方針の下、独仏との協調を進めながらEU統合の強化を目指している。但しEU内でのスペインの立ち位置は、理想とする方針の真ん中を歩きたい、自身で独自の方針・立場を取ることは望まないというものであった。

・産業・技術における高い国際競争力

- スペインは早くから再生可能エネルギーの実用化に取り組んでおり、現在では電源構成の内、再生可能エネルギーが4割に達している
- 交通インフラの整備も進んでおり、我々も後日マドリードからバルセロナの区間について利用した高速鉄道AVEはなかなか快適便利で、1992年セビリア万博に合わせて開業した後、今や路線総延長は欧州で本家フランスを抜いて１位、世界でも中国、日本に次いで３位と健闘している
- カタルーニャ問題は日本でも大きく取り上げられたが、歴史的・文化的に独自性が強い上、スペインの中でも相対的に豊かな環境にある事を盾に、受益が負担に見合わないと主張、全くもって身勝

手な理屈で独立騒動を起こしているのが実態。とは言え、国民投票をした場合には賛成票が過半数行かない可能性大という事から暫くは何も起きないと言うのが大使の見方であった。

- 日西関係 ～ 今年2018年はちょうど両国の外交関係樹立150周年と言う重要な節目を迎えている。折しも我々が欧州入りする直前に安倍首相がスペインを訪問しており、サンチェス首相との首脳会談の場で、両国間の関係を「戦略的パートナーシップ」に格上げする事が確認されたばかりとの事。友好ムードが大変盛り上がっている様子が窺えた。

最後に、なかなか触れる機会の少ない「太陽と情熱の国」スペインを知る上で有意義な勉強と親睦の場を提供頂いた大使公邸での夕食会の心温まるおもてなしに感謝しつつ、報告とする。

■ 【所　感】世界遺産　ケルン大聖堂

～ ザンクト・ペーター・ウント・マリア大聖堂 ～

佐々木　孝　富
オタフクホールディングス㈱
専務取締役

この度の欧州経済視察において、観光で集客をしている場所として、最初に訪問したのがケルン大聖堂である。正式名称は、聖ペトロとマリア大聖堂の意として、ザンクト・ペーター・ウント・マリア大聖堂というらしい。ゴシック様式の建築物として世界最大の姿は、ケルン中央駅前の広場から見ることができ、その驚愕する大きさと、外観の重々しく立派な姿には驚きを覚えた。

今回見た大聖堂は３代目で、1248年に建設がはじまった。しかし、16世紀に入って財政難があり、一度工事が途絶したらしい。

ナポレオン戦争の影響によりドイツでナショナリズムが高揚する中、中世ドイツに自民族の伝統を探し求める動きが強まった。建設途中であったケルン大聖堂に注目が集まったため、1842年に建設が再開された。全てが完成したのは建設開始から600年以上が経過した1880年のこととのことだった。気の遠くなる話である。ただ、ナポレオンの支配を不服としたドイツ人の気概を感じられる出来事でもある。

ケルン大聖堂

ドイツ人観光客にも人気の高い観光スポットで、ドイツで

最も人々が訪れる教会である。高さ157m、奥行き114m、幅86mもあり、40階のビルに匹敵する姿は迫力満点だ。

ケルンにおいて、中央駅を大聖堂近くに置くことにより利便性を高めつつ、周辺の開発と観光の充実化が図られていると推察した。

内部は広い幅の翼廊と高い中廊、大聖堂を支える石柱と石像、壮麗なステンドグラスなどが配され重厚感を感じる。そして、祈りをささげる人々。すべてを感じながら荘厳かつ静寂なひと時を過ごすことができる空間であった。

中でも、黄金の棺に納められた聖遺物は有名。東方三博士の聖遺物を持ち帰ったことで巡礼者が大幅に増え有名になったとのこと。聖遺物とは、東方の三博士の“頭蓋骨”のことで、聖箱の中に王冠をかぶった三人の賢者の頭蓋骨が納められていると言われている。

今回、他の観光視察先全般も踏まえ、インバウンド観光を拡大する取り組みとして、観光の名所を起点としたまちづくりやビジネスには学ぶべき点が多々あると考えさせられた。

余談だが、ケルン大聖堂の全体像を見るのに適した、対岸を結ぶ「愛の橋」としても有名なホーエンツォレルン橋がある。南京錠を橋の柵状の手すりに掛ける愛の表現が多数なされていた。が、少し怖さを感じたのは私だけだろうか。

最後に、欧州経済視察団参加者の皆様のおかげで充実した視察となりましたこと、感謝致します。

大聖堂内部

ステンドグラス

「愛の橋」ホーエンツォレルン橋

ライン川対岸から大聖堂を望む

■ 【所　感】 デュッセルドルフ

～ライン・ルール大都市圏の中心都市～

佐　藤　卓　己
㈱社サンエス
代表取締役社長

10月21日に日本を出発しドバイ経由でデュッセルドルフ空港に到着、広島経済同友会欧州経済視察の第一歩を踏み出した。到着後に宿泊地ケルン市に移動して、世界遺産のケルン大聖堂を訪ねた。

翌日は本来の目的地であるデュッセルドルフに移動、メッセ・デュッセルドルフ（Glasstec2018）の視察や、ジェトロ・デュッセルドルフでのブリーフィングを通してドイツ経済概況及び政治情勢並びに移民問題などについて知見を広めた。また、市庁舎訪問ではトーマス・ガイゼル市長にお出迎え頂き、市長自ら同市の概要や戦略などについてご説明いただくなど暖かい歓迎を頂いた。

デュッセルドルフの都市としての歴史は12世紀初頭から始まった。同市はライン川河畔に位置するライン・ルール地域圏の中心都市であり、人口約62万人、その内日本からの駐在員や家族は5,000人を占め、日本料理店や日本書籍店なども多数ある。また、ドイツ全土のみならず、近隣諸国の日本人駐在員も良く訪れる街と言われている。

添付した写真①は、市のシンボルとなっているマンホールで、子供が回転している絵柄が特徴的で、市街地のいたるところに設置してある。1288年にケルン大司教領と激しい領土争いが起こり、ヴォリンゲンの戦いでデュッセルドルフが勝利した時に、子供たちが側転をして喜んだのが始まりと言われている。それ以来デュッセルドルフとケルンは犬猿の仲と言われ、距離が近いにもかかわらず未だに飲むビールは全く異なり、互いの街で相手のビールは絶対飲まないそうだ。

写真①

歴史を感じる建物が並ぶ旧市街のなかに鳥料理で有名な老舗ビア・レストランがある。1628年に開業したZum Schiffchenである。380年近い歴史を誇り1811年にはナポレオンが店を訪ねたらしく、その時のテーブルがナポレオンコーナーとして残っている。(写真②は店の看板、写真③はナポレオンが座ったと言われる席にて池田団長と筆者)

写真②

写真③

駆け足でのデュッセルドルフ視察だったが、歴史と威厳のある市庁舎（写真④）を始めとする中世の美観を維持した街並みと、ドイツでも有

数の規模を誇るメッセ・デュッセルドルフの多種多様な展示商談会の開催により、国内外から多くの訪問客を呼び込み、また海外企業の拠点も多く集まり、一大経済都市として成長を続ける街の息吹に触れることができとても充実した視察であった。

写真④

■ 【所　感】デュッセルドルフ交通事情

堂　本　高　義
堂本食品㈱
代表取締役社長

ドイツは、30数年ぶりの訪問である。

今回は、主にインダストリアル4.0の動き、トルコ移民問題、シリア難民問題を体感することを目的として参加した。

しかし、視察報告の担当はデュセルドルフ交通事情であるので感想を述べる

1)　アウトバーンについて
制限速度なしの高速道路
しかも、料金タダ
そのうえ、事故も少なく、使い勝手は良いようである。

さすがに、国家戦略で造られる道路は、考え方が違う
日本では、考えられないことである。
ただ、昨今では、トラックを有料にするとかの意見もあり、議論されているそうだ。

詳しくは、ウィキペディアを。

アウトバーン

2） 市内の道路事情
まず、石畳の道路が各所にあること
次に、電線が地中化されていること
そして、ロータリー方式で信号が少ないこと
に気づかされた。

アウトバーン出口（ケルン市へ）

まず、石畳であるが、歴史があり、馬車の時代から使われている。
車にとっては、乗り心地も良くないし、スリップのリスクも高いのでは？
メンテナンスは、どのようにされるのだろうか？

日本でも電柱の地下化が、話題になるが、電線が地上にないのということが、とてもすっきりして、いいなあと感じられた。
短所もあると思うが。

ドイツ高速鉄道（ICE）

ロータリー方式は、長短あるが、日本では、少なく、中国には、たくさんある。
アメリカでは、少なかったと思う。

3） その他
インダストリー4.0について
展示会場で運営の説明を受けたが、全然IOTがすすんでいない、または、進められないのに驚いた。
例えば、入場時の顔認証とか、スマホチケットとか、情報処理とか。
中国のほうが、よほど進んでいると思える。残念であった。

デュッセルドルフ路面電車

移民問題
今回は、実際に体験できなかった。

ただ、通訳の川辺さんを知りえたのは、収穫大であった。
彼の通訳としての知識の豊富なこと、ドイツ在住者としての現場の声。
今も、やりとりしているが、ブログが、更新されないのは、残念である。

電線地中化街の風景

市庁舎前の石畳み道路

また、帰国後、メルケル首相が、党首をやめるという報道にびっくりした。
流れとして、経済は、順調だが、移民問題は、世界的に変化している。
日本もしっかり検討すべきと思う。

国際交流も、時差の関係で、あまりできなかったのも、残念である。

多くの経験に感謝 !!

■ 【所　感】ドイツの食文化

中　川　玲　子
社労士法人ＳａＬａｃ（サラック）
代表

『ドイツの食文化』が今回の担当テーマだということで、最初の視察地ドイツのデュッセルドルフとケルンでは、食事に注意を払い、現地添乗員には食の話題を投げかけるようにした。中には「ソーセージだけは美味しい」と発していた人があったが､残念ながら私の口には合わない食事が多かった。

右写真のような各種ソーセージに、付け合わせの千切りキャベツを塩漬けしたザワークラウトとマッシュポテトが添えられているのが、ドイツの定番料理だろうか。

ザワークラウトは酸味から考えて、キャベツの酢漬けと思っていたのだが、調べてみると乳酸菌発酵させたものであって酢は使用していないとのことであった。

その乳酸菌は植物性乳酸菌であり、動物性乳酸菌に比べて胃酸などに強く、生きたまま腸に届く割合が高いため、腸の働きや免疫力を高める働きに優れており、便秘が改善される効果と老化や生活習慣病が予防されるなどの効果があるらしい。また、栄養成分ビタミンＣ、ビタミンＵ、ビタミンＫ、カルシルム、カリウムなど、実に身体に嬉しい効果があるザワークラウトだった。

付け合わせで、美味しく気になったものが一つあった。ジャガイモと何かで団子のような形をしていて、もちもちの触感が良かった。これはクヌーデルとかクローゼとか言われ、茹でジャガイモと潰したパン生地をこねて丸めているらしい。

メインのソーセー

ジはチキンやポーク等のお肉に変わることがあり、グルーピーソースなどが掛けてあるのだが、味が濃過ぎてほとんど残した。

ドイツビールは、アルコールには弱い私にも美味しく飲めた甘めのビール、白ビールから黒ビールまで各地域で様々な地ビールがある。

驚いたのは、レストランで飲むビールグラスに目盛りが入っていたことだった。グラスに注がれるビールの量が一定でないと客から苦情が出るらしい。

ドイツの料理は、兎にも角にも工夫のない料理が多く、味も塩辛く濃いめであった。ドイツ人はどのような食生活をしているのだろうかと、現地に住む日本人添乗員の方に聞いてみた。

朝食は、パンとコーヒー。

昼食は、簡単肉料理の温かい食事。

職場には電子レンジが置かれていることも多く、簡単チキン料理やピザなどを日本の弁当のように持参して温めるらしい。スーパーには温めるだけの様々な冷凍食品が売られていた。

夕食にはびっくりしたが、通常はパンとハム・ソーセージの冷たいもののみ。

温かいスープかジャガイモなどの一品があれば御の字らしい。

ドイツは生活や人生においての食の位置づけが低い人が多く、一般的に日本人ほど食へのこだわりや情熱が薄い。

通常は冷たい食事であり、温かい料理を作ったとしても一品、一皿料理が多い。料理が４種類並んだら、パーティーだという。メイン料理と副菜、サラダ、汁物の４種類以上ある日本の夕食は、毎日が記念日パーティーということになるのだろうか。

『ドイツの食文化』は「お腹が空くから摂る」のであり、「手間が掛からない」ことが重要で、料理作りや後片付けの時間を取るより、家族とのリラックスした時間や、掃除やインテリアに専念し「住空間」を美しく保つことの方が大切と考えられているようである。

■ 【所　感】ユーラシア大陸最西端・ロカ岬

～ ここに地終わり、海始まる ～

狩　野　牧　人
㈲トッツ
代表取締役

ロカ岬は、ポルトガルの首都リスボンから程近い、ユーラシア大陸の最西端／北緯38度47分、西経９度30分に位置している。岬の西には大西洋が広がり、その遥か先にはポルトガル領のアゾレス諸島がある。世界遺産として有名な観光都市シントラやカスカイスから鉄道やバス等のアクセスも整備され、リスボンからの日帰り観光も可能となっている。

道路標識　cabo da Roca

天候にも恵まれ、専用バスで訪れたロカ岬は壮大で、もはや言葉にならないほどの大海原の絶景は、「地球は丸い」を実感させられた。今から500年以上も前、現代のような精巧な技術やテクノロジーもない中、勇気ひとつで海へ飛び出した冒険家達。そんな彼らも眺めたであろう見渡す限りの絶景が目の前に広がり、「海の向こうにはどんな景色が待っているのか……。」そんな期待に胸を膨らませた冒険家達を思うと、当時のロマンを肌で感じることが出来た。又、到着したのが比較的早い時間帯であったため、大勢のツアー客と一緒になることもなく、ほぼ無人のロカ岬を堪能することも出来た。

ロカ岬遠景

西の果ては断崖絶壁

地球は丸い　ロカ岬にて

次に、大海原の風景と同時に飛び込んできたのが、大きな断崖絶壁の風景。ロカ岬自体も高い崖の上に立っているのだが、その高さはなんと140メートル、落ちたらひとたまりもない。日本のように安全第一といった感じではなく、自然をそのまま残

している雰囲気なので、観光には充分な注意が必要となる。又、崖下に耳を傾ければ、波が崖に打ち寄せる特有な音色も堪能することが出来た。

岬の中心から少し外れた場所には、ホルトガルの有名な詩人でルイス・デ・カモンイスの叙事詩の一節「ここに地終わり、海始まる」の言葉が刻まれた石碑が立っており、インド航路を発見したヴァスコ・ダ・ガマなど、時はまさに大航海時代、ボルトガル人による挑戦と勝利は、まさに「人類の進歩」を象徴するものだったようで、大航海時代のロマンが今なお残る､｢冒険｣といった感じ……感慨ひとしおであった。

ヨーロッパ大陸最西端の石碑

最後は岬近くの案内所に行き､｢ユーラシア大陸最西端到達証明書｣を発行してもらったが、自身の名前や日付、番号が昔の書体で書かれたこの証明書（西果ての到達証明）は、自身大変思い出に残る素敵なものとなった。

この度のドイツ・ポルトガル・スペインへの経済視察に参加して感じたことは、アジアの最東端にいる私達が長い旅路を経てユーラシア大陸最西端に到着、この地･ロカ岬に立っていると思うと､世界最大の陸地･ユーラシア大陸の大きさを改めて認識したことである。又、大変興味深い中世ヨーロッパの街中や施設も堪能でき、視察場所でも様々なお話が聞けたことは、私にとって良い経験となった。

真ん中が筆者

■ 【所　感】リスボンの世界遺産

前　田　　昭
㈱広島銀行
取締役常務執行役員

15世紀初頭にヨーロッパ列強諸国のなかで、いち早く勇猛果敢に未知の海に乗り出したポルトガルは、大航海時代の先駆者として、新たな交易ルートの開拓などにより巨万の富を築いた。

特に、当時の世界経済の中心として繁栄したリスボンとその近郊には、大航海時代の栄華を今に伝える歴史的建造物が数多く残っているが、その中から、世界遺産にも登録されている「シントラの文化的景観」､「ジェロニモス修道院」､「ベレンの塔」について報告する。

1．シントラの文化的景観

リスボンから西へ30Km、深緑のシントラ山脈の麓に王宮を中心とした豪奢な城館や貴族の別荘な

どの文化財が点在するシントラは、その美しい街並み全体が「シントラの文化的景観」として1995年、世界遺産に登録された。

シントラ王宮

今回訪問したシントラ王宮は、15世紀初頭から19世紀後半にかけてポルトガル王家が夏の離宮として使用したものである。元来はイスラム教徒がイベリア半島を支配していた時代に残された建物を、14世紀初頭にディニス１世が居城とし、その後、歴代の王が増築を進めたことで、ムデハル様式、ゴシック様式、マヌエル様式、ルネッサンス様式など多彩な建築様式が混在する現在の姿に至っている。

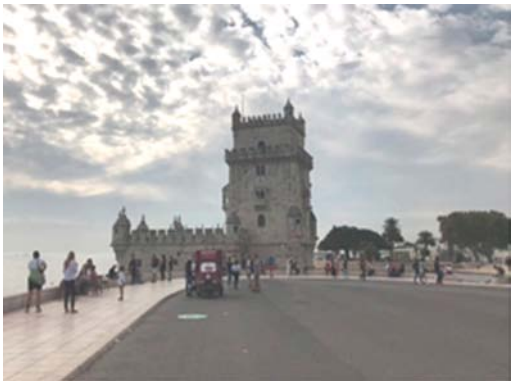
なかでも、①ジョアン１世が英国に嫁いだ娘の幸せを願って、天井に夫婦円満の象徴とされる白鳥を、娘の年齢と同じ27羽描かしたマヌエル様式の「白鳥の間」、②ジョアン１世の浮気事件が発端となって、天井におしゃべりを意味する鵲（カササギ）が多数描かれている意味深な「鵲の間」、③狩猟の光景を描いたアズレーション（ポルトガル伝統の装飾タイル）が見事で王宮内で最も豪華と言われる「紋章の間」、④高さ33mの円錐形の厨房の煙突が特徴的で、ポルトガルに現存する最古のアズレーションが残っている「アラブの間」などの個性溢れる空間は見応え十分で、様々な文化の融合美を感じさせるものだった。

２．ジェロニモス修道院

ジェロニモス修道院

ジェロニモス修道院は、ヴァスコ・ダ・ガマによるインド航路開拓やエンリケ航海王子の偉業を称えるとともに、新天地開拓へと乗り出していく航海の安全を願って、マヌエル１世が1502年に着工した後、香辛料貿易などで得た富をつぎ込み、完成まで約1世紀もの歳月を費やしたといわれている。マヌエル様式を代表する、大航海時代に繁栄したポルトガル海洋国家の記念碑的な建造物であり、「リスボンのジェロニモス修道院とベレンの塔」として1983年、世界遺産に登録された。特に中庭を囲む回廊の装飾は、マヌエル様式の美が凝縮されており、とても石を彫ったものとは思えないほど精緻なものである。

３．ベレンの塔


ベレンの塔

ベレンの塔は、ヴァスコ・ダ・ガマの世界一周の偉業を記念して、マヌエル１世が、テージョ川からリスボンに出入りする船を監視し、河口を守るための水上要塞として建造したもので、1520年に完成した。

白い石灰岩に華麗な彫刻が施されたマヌエル様式の優雅なテラスを持つこの３階建ての塔を、司馬遼太郎は貴婦人がドレスの裾を拡げている姿に例え、「テージョ川の貴婦人」と称賛した。長い年月にわたり船乗りたちを見守ってきたベレンの塔は、要塞と言いながらも、確かに女性的な優しさも湛えていた。

４．所　感

大航海時代に海外との積極的な貿易拡大で巨万の富を築いたポルトガルは、出会った異文化を吸収

しながら自国の文化との融合を図ったからこそ、このような素晴らしい文化や芸術が花開いたものと思われる。

一方で、現在の世界情勢に目を向けると、従来からのグローバル主義が危機を迎え、保護主義やポピュリズムの台頭による分裂が強く懸念されている。

いつの時代でも、多様な文化・価値観・宗教をもつ人々が交流し合う時には、大航海時代のポルトガルのように、異質なものをリスペクトする姿勢や寛容な心が重要であることを、今回のリスボンの世界遺産巡りを通じて改めて考えさせられた。

■ 【所　感】リスボン交通事情

榎　本　暢　之
㈲エノモト
代表取締役

リスボンの路面電車と云えばレトロなイメージを持っていたが、実際その通りであった。家と家の間の狭い道を旧式の市内電車がノドカに走っている風景は興味深かったが、新市街地では広電グリーン・ムーバー同様のスマートな３連接・低床車両も運行していた。できれば古い方に体験乗車をと思ったが時間的余裕がなかったのが残念であった。車窓からの気付きとしては、軌道が少し狭いように感じられたことである。また、リスボンも日本と同様の歴史をたどり1960年代以降のモータリゼーションや地下鉄の開業に伴う路線廃止も多かったようだ。現在では５路線・総延長48kmのトラムネットワークが57両の車両によって運行されている由。

レトロな市電

３連接低床車両

日常交通と一味違うケーブルカーには市内に３つある内の１つ、グロリア線に乗ってみた。リベルダーデ通りからバイロ・アルトの高台に上る路線で、この街特有の急勾配を約５分で登る。ガイドによると通常は観光客が殺到して30分程度待つとの話だったが、幸運にも私たちは直ぐに乗車できたのだが、乗る前に一回、そして乗ってまた驚いた。車両は落書きでペイントされ、沿線の家屋も落書きだらけである。何だ！これは？観光地なのに放置された落書きは、街の風情？旅の旅情？が台無しと感じた次第である。

この街は新市街と旧市街の対比が鮮明で、旧市街の道路は狭くかつ急勾配が多い。バス等はお互いが譲り合い、ギリギリの間隔で離合している。観光客にとっては風情ある街並みだが、住民には不便

が多いのではないかと思う。私たちにとってその体験は、２日目昼食の小高い丘のレストランへの道行きであった。昔ながらの曲がりくねった狭隘道路はバスが通れないため、駐車場から急坂路の石畳を歩いて向かうことになった。ようやく着いたお店からの眺めは素晴らしく、眼下に停泊する豪華客船等が見渡せる開放的な空間が存在していた。また、メニューもご当地名物のイワシの塩焼きが美味しく、給仕スタッフもフレンドリー、特に女性の気配りが行き届いていて快適な時間を過ごせたことは、急勾配の苦労と併せ良い思い出となった。

今回の視察は４カ国を11日間で回る忙しい行程だったが大変有意義であった。

池田団長はじめ団員の皆様方に敬意を表し報告を結ばせていただく。

急勾配の石畳

港に停泊中のクルーズ船

ケーブルカー

■ 【所　感】プラド美術館

世界屈指の美の殿堂・歴代スペイン王家のコレクション
～ ベラスケス、ゴヤ、エル・グレコ ～

貞　益　　徹
丸紅㈱中国支社
支社長

視察第７日目となる10月27日（土）はマドリードの目玉とも言える美術館巡りの日。いよいよ日本出発前から大変楽しみにしていた日の到来である。午前中はソフィア王妃芸術センターでピカソの「ゲルニカ」と暫し対面し、Café Gijonでの昼食後、スペイン三大画家であるベラスケス、ゴヤ、エル･グレコの作品が待つプラド美術館へ。

1819年11月19日に国王フェルナンド７世の発意と出資によって「王立絵画美術館」として創設された歴史のある美術館。第二次世界大戦勃発後ニューヨーク近代美術館に保管されていた

プラド美術館正面に立つベラスケス像。
現在は改装中のため使用されていない

「ゲルニカ」がスペインに返還された1981年にはプラド美術館別館に収容され、1992年にソフィア王妃芸術センターが開館された際に移送されるまで「ゲルニカ」はプラド美術館に展示されていたという経緯もある。

美術館には長い列ができていた

ゴヤ像が立つゴヤの扉

限られた時間内でスペイン三大画家を鑑賞する“鑑賞ツアー”はまずエル・グレコから始まった。ギリシアのクレタ島で生まれた「ギリシア人」というあだ名で知られる画家。「胸に手を置く騎士」を筆頭に肖像画が並ぶ。そして「聖三位一体」など顕著な人体の長身化と流動性を帯びた形態が特徴的なグレコの作品。倉敷の大原美術館と上野の国立西洋美術館で見たグレコの絵と同様の作品群が展示されている。

続いてはベラスケス。マネが「画家の中の画家」と評したプラド美術館の要である宮廷画家であるベラスケス。中心に置かれているのは「ラス・メニーナス（女官たち）」。プラド美術館でも最も著名な作品。絵の中に多くの謎が隠されており、様々な解釈がなされていることでも有名な絵であるが、真ん中に立つ王女マルガリータは可愛らしい。イメージしていたよりも実際の絵のサイズが小さいという印象を抱いたが、じっくりと絵の謎解きをする時間もなく、ゴヤの展示室に移動。

プラド美術館を代表するスペイン三大画家のひとりであるゴヤ

鑑賞した作品数が一番多かったためか、今回の三大画家鑑賞ツアーの中では一番強い印象を受けたゴヤ。言うまでもなく、ベラスケスに並ぶプラド美術館の目玉の画家である。「カルロス４世の家族」「裸のマハ」「着衣のマハ」と有名な絵が続く。一番のお目当ての作品は「1808年５月３日の銃殺」。美術の書籍には必ず登場するこの衝撃的な絵は後のピカソにも影響を与えたと言われている。劇的な画面に感動し、グロテスクな「我が子を食らうサトゥルヌス」はさっと見て鑑賞ツアーの終了。

プラド美術館は2019年に創立200周年を迎える

実は今回のプラド美術館訪問は約25年ぶりの再訪であったが、パリのルーヴル美術館やニューヨークのメトロポリタン美術館にも引けを取らない素晴らしい美術館であることを再認識した。日本でも2002年、2006年、2011年、2015年、そして今年の２月～10月と過去５回に亘ってプラド美術館展が開催されており、何度か足を運んでいるがやはり本場で鑑賞するのが一番である。

現在、プラド美術館は3500万ドルの費用をかけて今後４年間に亘る拡張工事を行っているが、来年11月に創設200周年を迎える予定となっており、今後様々な特別展示等の催しが行われるため、益々目が離せない状況である。次回の再訪がいつになるか分からないが、その時を楽しみに美術鑑賞を続けたいと考えている。

いよいよプラド美術館の入り口へ

プラド美術館への入り口　ヘロニモスの扉

■ 【所　感】ソフィア王妃芸術センター

～ 20世紀を象徴する絵画“GUERNICA” ～

田　村　満　則
ヒロコンフーズ㈱
代表取締役社長

入口前広場

スペインのマドリードにある美術館。フアン・カルロス１世の王妃ソフィアにちなんで名付けられた。20世紀の近現代美術を中心に展示されている。メインの建物となるサバティーニ館は、18世紀にカルロス３世が、イタリアの建築家フランチェスコ・サバティーニに命じて設計させた病院を改築したものである。サバティーニ館の南側に2005年、フランスの建築家ジャン・ヌーヴェルの設計による新館が増築されている。サバティーニ館は１階から４階までの４フロア、新館は０階から３階の４フロアで構成されている。パブロ・ピカソやサルバドール・ダリ、ジョアン・ミロなどの作品を多く所蔵する。ピカソの代表作‘ゲルニカ’は、スペインへの里帰り後、プラド美術館から本美術館に移され、常設展示されている。企画展示は主にサバティーニ館３階で行われる。

ソフィア王妃芸術センター入口

サバティーニ館の２階には展示室第201室から第210室があり、三大巨匠のピカソ、ダリ、ミロの有名作品は２階に展示されている。中でもピカソのゲルニカは見逃せない作品である。縦3.5m、横7.8mもある巨大な作品で、バスク地方にあるゲルニカという町が空爆を受けた時の様子が描かれている。1937年に描いた絵画、およびそれと同じ絵柄で作られた壁画である。ドイツ空軍のコンドル軍団によってビスカヤ県のゲルニカが受けた都市無差別攻撃（ゲルニカ爆撃）を主題としている。20世紀を象徴する絵画であるとされ、その準備と製作に関してもっとも完全に記録されている絵画であるとされる。発表当初の評価は高くなかったが、やがて反戦や抵抗のシンボルとなり、ピカソの死後にも保管場所をめぐる論争が繰り広げられた。ゲルニカは‘偉大な神が降りた’とも言われる。

パリでゲルニカ空爆（1937年４月26日）の一報を受けたピカソは、パリ万国博覧会のスペイン館で展示される予定の壁画を制作していたが、急遽テーマを変更してゲルニカを題材に取り上げ、油彩よりも乾きが早い工業用ペンキを用いて、大作ゲルニカを６月４日には完成させた。白黒で表現された一面モノクロームのキャンバスには、人間のような目を持った闘牛の頭、その下には空爆の犠牲となった子供を抱えて泣き叫ぶ母親、狂ったように叫ぶ馬、天を仰ぎ救いを求める者など、逃げまどい苦しみ叫ぶ人々や動物の様子が描かれている。左下で倒れている人物はピカソ自身であるという。これに対してピカソはこう反論している。‘牡牛は牡牛だ。馬は馬だ。もし私の絵の中の物に何か意味をもたせようとするなら、それは時をして正しいかもしれないが、意味を持たせようとするのは私のアイディアではない。君らが思う考えや結論は私も考えつくことだが、本能的に、そして無意識に、私は

ソフィア王妃芸術センター館内にて

館内風景

同館側面とガラスのエレベーター

ソフィア王妃芸術センター新館入口

絵のために絵を描くのであり、物があるがままに描くのだ’と述べている。

数多くの女性遍歴で知られる恋多き芸術家ピカソは、ゲルニカ製作当時はバレリーナで貴族出身のオルガ･コクローヴァと結婚していたが、カメラマンで画家のドラ･マールと愛人関係をもっており、ドラ・マールはピカソの良き理解者としてゲルニカ製作過程を写真に記録していたことでも知られている。ここでなんと、ピカソと仲睦まじく過ごすドラ・マールに対して、もう一人の愛人が取っ組み合いのケンカを始めたという逸話が存在するという。この突拍子もない逸話によれば、ドラ・マールとフランソワーズ・ジローの修羅場を見たピカソはインスピレーションを受け、完成したゲルニカの中で両腕を揚げて泣き叫ぶ右上の女性がドラ・マール、絵の中央でランプを持ち室内を覗き込んでいる女性がフランソワーズ・ジローと言われる。しかし、ピカソとフランソワーズ・ジローが出会ったのは、絵画ゲルニカが完成した1937年６月から約６年後のことであり、当時はまだ彼女は中学生ぐらいの年齢であったことから考えれば、このエピソーセージは若干無理があるようである。

ただ、ピカソならこんなことが本当にあってもおかしくないなと感じさせてしまう事自体、後世に名を残す偉人ピカソの型破りで特異な個性の表れであり、その余人に代えがたい奇抜で自由な生き方と天賦の才能には感服する。

ソフィア王妃芸術センターの必見作品としてはパブロ・ピカソの作品としてゲルニカの他に、‘青衣の女’、‘静物（死んだ小鳥）’、‘フルーツボウル’

サルバドール･ダリの作品として‘偉大なる手淫者’、‘透明人間’、‘ヒトラーの謎’、‘窓辺の少女’、‘後ろ向きに座る女’

ジョアン･ミロの作品として‘パイプをくわえた男’、‘パームツリーのある家’、‘カタツムリ、女、花、星’

ファン・ダンスの作品として‘海を前にしたギター’、‘バイオリンとギター’

ファン・グリスの作品として‘ジョゼット・グリスの肖像がある。

■ 【所　感】フラメンコとスペイン文化

～ 歌とギター・踊りと観客の協演 ～

山　根　　近
久福汽船㈱
代表取締役

ポルトガルとスペインの国民性の違いポルトガル人は温和で、素朴で地味な我々日本人に似た性格の国民であるのに対して、スペイン人は情熱的で、華美な性格を持つ国民である。

これを如実に表すのがポルトガルのファドであり、スペインの闘牛とフラメンコである。

14～16世紀の大航海時代に、世界に君臨した両国の代表的な民族舞踊に、如何にこの差が出てくるようになったのだろうか？

この度の欧州視察旅行では両方のショーを見る機会を得たのだが、フラメンコの所感の担当なので、マドリードの夜に感銘を受けたフラメンコの魅力を伝えてみたい。

独自の言語を持ち、自らを“ロン”と称するジプシーが始めた、歌とギターと踊りの３つをまとめたものをフラメンコと呼ぶ。アラビア色の濃いものだった元来のアンダルシアの民族舞踊を彼らなりに改造して作った伝統芸能である。彼らは500年前にエジプトからイベリア半島へ渡ってきた。“エジプシアン”が変化して“ジプシー”になったと言われている。フラメンコは当時のまま現在に伝わっているわけでは無く、映画の影響でドラマ性を帯びたり、北スペイン地方の民族舞踊をアレンジしたり、クラシックバレエやモダンバレエと組み合わされたり、ジャズと競演するなど、時代によって変化を見せている。

現在、一流のフラメンコは、マドリッドかフラメンコの発祥地と言われるセビリアか、あるいは日本かだと言われているほど、日本に一流の踊り手やギター奏者が移り住んでいるそうだ。そこが、ポルトガルのファドと大きく異なる点である。

（日本にはフラメンコギターも含むと世界最大級のフラメンコ教室があるらしい）

フラメンコギター奏者

総踊り

フラメンコがその他の舞踊と最も大きく異なる点の一つに、通常踊りというものは音楽に合わせるのだが、フラメンコは反対で、歌とギターが踊り手に合わせる踊りである。

踊り手が、ギターを聴かせるところ、歌が入ってくるところを全身で表現し、各踊り手によって表現方法が異なる。そのため、フラメンコの踊り手はオーケストラの指揮者に例えられることが多い。

そして、フラメンコ観賞時に最も重要なのが、”ドゥエンデ（duende)”である。日本語では表現しきれないニュアンスのスペイン語なのだが、辞書によると「魔的なるもの」「鬼気迫るもの」あるいは「小さな化け物」という意味になる。観賞していて何か鳥肌の立つような、背筋が寒くなるようなものが感じられるかどうかが重要だ。歌と踊りとギターは３本、あるいは観客を入れて４本の平行したレールの上を走る列車に例えられる。平行して始まり大体はそのまま終わるのだが、時としてこの３本（もしくは４本）のレールが１本に重なることがある。踊り手が恍惚状態になり、３本のレールが１本に重なった時、“ドゥエンデ”が出てくるのだ。ドゥエンデを経験せずに終わる踊り手はたくさんいるが、時にはワンステージで２回もそれが起こることがある。ただし、全く同じ条件で踊ったとて、必ずしもドゥエンデが出るわけでは無い。何百回と観賞している現地ガイドですら、２、３回しか経験がないらしい。その体験に感動し、翌日全く同じ条件で観賞したが、その時のような感動は無かったそうである。ちなみに、スペイン人によれば、教わった通りに踊る日本人の踊りは綺麗で上手だが何かが足りないらしい。

フィナーレ

また、フラメンコの足の動きは「板」を表すタブラオという音響装置が付いた舞台で足を大きく動かすもので、”サパテアード（zapateado)”と呼ばれるクライマックスはフラメンコの醍醐味である。こちらも、ドゥエンデを地の底から呼び出すための動きだそうだ。また、フラメンコの掛け声や手拍子は歌舞伎の掛け声等と同様、フラメンコに詳しくなければ困難で、素人が行えるものではない。例えば現地ガイドは、芸歴40年ほどの日本人女性が見事な掛け声を入れているのを聴いたそうだ。その時、この掛け声は４本目のレールだと実感したということである。

また、フラメンコの歌詞については、同じフレーズを繰り返すことが多く、スペイン人が聴いてもよく分からないというほど不明瞭なスペイン語なのだが、歌のメッセージは愛の歌が多く、喜怒哀楽を表現しながら情熱的に踊る。ショーについては、昔は花売りから花を買い、気に入った踊り手に対してその花を投げるといったような習慣があったが、現在はほとんど無くなっているらしい。（イメージの強いカスタネットも使っていなかった）

ショーレストラン入口

時代と流行によって民族舞踊も様々な形に少しずつ変化しており、変化を続けられるものだけが生き残っていくのは、どの世界でも同じことなのであろう！

■ 【所　感】スペイン新幹線

～マドリッドからバルセロナへ～

吉　田　　豊
白井汽船㈱
代表取締役社長

10月28日日曜日、晴れ気温６℃。私たちはスペインの新幹線でマドリッドからバルセロナに移動。この新幹線は、高速鉄道AVEと呼ばれる。1992年セビリア万博に合わせて開業、コロンブス500年記念でもある。路線総延長は中国、日本に次いで３位。欧州では、本家のフランスを抜いて１位である。AVEは時間を売りにしている為、開業当時５分以上遅れた場合は料金払い戻しと公約。過去に15分遅れて払い戻したそうだ。現在では、マドリッドとバルセロナ間で30分以上遅れると払い戻しと言っている。2003年３月11日、このマドリッド駅でテロが発生した。192名の死者を出した。その影響で今も駅の改札に向けて写真撮影は禁止である。近くに犠牲者の慰霊碑があり、空港ほどではないが、乗客のセキュリティーチェックがあった。我々は難なく通過した。私たちはグリーン車であった為、構内の専用ラウンジに入った。飲物、食べ物は問題なし。日本の航空会社のラウンジのようであった。９時30分私たちは２号車に乗り込み出発。スーツケースは４号車に積み込んだ。これはバルセロナ駅で乗降客と重なり、荷物を車両から降ろすのに随分焦った。手荷物は自分たちの車両で各自が管理すべきであった。車内ではフランスの新幹線同様１席と２席の横３席でゆとりのある配置であった。新聞や軽食のサービスもあって、JRのグリーン車よりレベルは上、味もまずまずであった。新幹線の構造は、車輪の幅が３種類あり、車両の長さが短く、カーブの走行性を高めている。また、日本の新幹線は座席を高級化しているがスペインの新幹線は機能とサービスを充実していた。マドリッドからバルセロナまで３時間の旅。途中のトンネルは約30か所、最高速度は300キロ、途中でスピードが変化するので完全なオートスピードコントロールではなさそうであった。

車窓からの風景は、前半は赤茶けた大地、動物は殆ど見られなかっ

た。時折風力発電の風車が見えた。また、オリーブの木々が沢山あった。外気温は６℃から15℃のレンジで内陸のマドリッドと海岸線のバルセロナで10℃くらいの変化があった。旅の後半は緑も増加し、途中駅の周辺は企業も見られた。

あっという間の快適な３時間の旅をさせて頂いた。

■ 【所　感】世界遺産　サグラダ・ファミリア

～ 1882年着工、2026年完成予定 ～

山　根　以久子
㈱サンポール
代表取締役

サグラダ・ファミリア

1852年、カタルーニャ南部のレウスで生まれたアントニオ・ガウディー。小さいころから、自然が大好きで、自然に親しみながら大きくなった。20歳ころにバルセロナへ出て本格的に建築を学び、1878年のパリ万博でショーケースのデザインをしたことで脚光を浴びた。その後、バルセロナの実業家のエウセビオ・グエルに才能を認められ、サグラダ・ファミリアのほかにも多くの作品（世界遺産のカサ･ミラ､グエル公園、カサ・バトリョなど）を残している。

サグラダ・ファミリアはガウディーが手掛け、いまも作りつづけられている教会としてあまりにも有名ではあるが、実際にはガウディーは最初から建築にかかわっていたわけではなかった。

聖ヨセフ信徒協会が人々の寄付金で教会を建てることを計画し、建築家フランシスコ・ビリャールに依頼、彼の設計のもと、1882年３月19日に着工された。しかし、ビリャールはすぐに意見の対立から翌年に辞任してしまい、そのあとをガウディーが引き継いだということである。

ガウディーは設計を練り直し、1926年に亡くなるまでずっとこの教会の建築に携わった。亡くなる直前には、教会内に住居を移してまでサグラダ・ファミリアの設計・建設に心血を注いでいた。

当初、ガウディーは模型と、火と錘を用いた実験道具を使って構造の検討をおこなっていたと言われる。1936年に始まったスペイン内戦によって、ガウディーが残した設計図や模型、弟子たちが作成

サグラダ・ファミリア
生誕のファザード（入口）

礼拝堂

ガウディ作　カサ・ミラ

ガウディ作　グエル公園

した資料等が散在し継続が危ぶまれたが、職人たちの口伝え、残されたデッサンをもとに、その時代その時代の建築家がガウディーの設計構造を推測する形で、いまも建設が続けられている。

完成までに300年はかかると予想されていた工事だが、技術の進歩に伴い工期は短縮され、2026年（ガウディー没後100周年目）には完成するだろうと言われている。現在、日本人の外尾悦郎氏が彫刻の担当として従事されている。

ガウディは、当初の計画よりももっと巨大な、それぞれの部分が特徴的な意味合いを持った教会を建てようと、ピラミッド型の18本の塔を持つ巨大な教会を構想し、教会に入る入口（ファザード）も３つ作ろうとした。現在完成しているのは、イエスの誕生を表す「生誕のファザード」と、キリストの受難、死、復活を表す「受難のファザード」の２つだけである。３つ目の栄光やキリストの教えを表す「栄光のファザード」は建設中である。

「生誕のファザード」は、2005年にユネスコの世界遺産に登録されている。

長い年月をかけ、多くの人々の願いを集めて、造り続けられてきたサグラダ・ファミリア。2011年には教皇ベネディクト16世により大聖堂として認められた。2026年の完成が楽しみである。

■ 【所　感】ドバイ首長国

～ 発展を続けるアラブ首長国連邦（UAE）～

丸　川　眞　佳
㈱アートテレビ
代表取締役

ハイアットリージェンシーレストランからの眺望

アラブ首長国連邦（UAE・United Arab Emirate）について、中東の砂漠に囲まれ石油のオイルマネーで潤い世界一の高層ビルがある国ぐらいしか知識がなかったが、実際に訪れての感想は建物や街並みに目を見張るものがあり、すべてが新鮮に映った。 バルセロナからUAEのエミレーツ航空で深夜ドバイ空港に到着しバスでシャングリラ・ホテル・ドバイにチェクイン。ロビーや室内はさすがと思わせたが、お風呂の湯を出すと茶色い水が流れ出し驚いた。砂漠のため日本の海水淡水化システムを利用しているとのこと。朝食は世界各国から客が宿泊するとあって多彩な料理が味わえた。貸し切りバスで市内の視察に出発。

ブルジュ・ハリファからの夜景

ガイドさんの説明によるとUAEは国土の大部分が砂漠で首都のアブダビやドバイなど七つの首長国で構成されていて原油埋蔵量は世界５位。ドバイは80年代から多産業化を進め、GDPの９割近くを石油化学関係の製品などの製造業、流通、金融、観光といった石油以外の産業で稼ぐ裕福な国でまた世界有数の観光･リゾート地としても有名だと知らされた。

最初に高層ホテルの回転展望台にあるレストランに立ち寄り旧市街地、ダウンタウン、新設中の湾岸施設、住宅地区とドバイの市内全景を観察した。

次に訪れたのが近代都市ドバイの中で、下町感あふれるのがデイラ地区、スパイス・スークには店内や店先に所狭しとスパイスか並び異国感あふれる街並みだ。続いて有名なゴールドスークに移動、指輪やネックレス、ブレスレットなどの金の装飾品を扱う店が並び、買い物散策を飽きさせない人を呼び込む魅力ある商店街だと感じた。

市民の足として使われている小型の水上タクシーでドバイ・クリークを渡った。

ドバイ最終日は私の誕生日でした

水上タクシーでドバイ・クリークを渡る

異国情緒たっぷりのオールドスーク（市場）

ゴールドスークは金製品が中心

大きなダウ船が展示された「ドバイ博物館」は昔のスークの様子や砂漠やオアシスでの人々の生活ドバイの歴史にまつわる遺物が展示されている。

近くの「バスタキヤ」はドバイで最も古い風景を残している歴史地区で多くの伝統的建物が保存され自由に散策出来、昔のアラブ商人が見たであろう景色が楽しめた。

市街地や住宅地をバスで移動、印象に残ったのが車窓に映る超高層ビル群と豪華な住宅、イスラム寺院のモスク、そして世界でただ一つの７つ星のホテルに沈む夕日が美しく印象に残った。ホテルの近くのリゾート施設「マディナジュメイラ リゾート」はひとつの街をイメージしており、広大な敷地に３つの高級ホテルや約140店舗もあるショップ等、ドバイのリゾート観光のスケール感に驚きながら長時間のショッピングや食事に満足できた。

ドバイモールも、世界最大級で 東京ドームが23個入るほどの広さに高級デパート、店舗、エンターテイメント施設など約1200以上の店が並ぶ巨大施設だ。

モール内を散策していると人工の湖で水と光の噴水ショーに出会うなど観光客を飽きさせない工夫が至る所にされていた。

最後に訪れたのが世界一高い超高層ビル「ブルジュ・ハリファ」は高さ828m，206階建。高速エレベータで揺られながら屋内展望台に、階下に見える夜景は高層ビルが立ち並び近代都市へと発展を続ける勢いを感じた。

UAEは2020年のドバイ万博に向けて現在の最高層ビルより高い「ザ・タワー」建設、観光ではインバウンド数の倍増など多くの国家プロジェクトが進行中で商業、金融のみならず，スタートアップやIT関係の企業・人材の誘致にも力を入れていると言われ、ハード面だけでなくソフト面での発展も期待できる国として参考になる事項が多く有意義な視察であった。

■ 【所　感】各国の商業施設について

～ ポルトガル・スペイン・ドバイ首長国連邦 ～

沖　田　康　孝
広島ガス㈱
執行役員

今回の経済視察において、各国の様々な市場を見学する機会を得たので、これについて報告する。

ポルトガル　リスボン　リベイラ市場

1882年に開設された市場で、2014年にリニューアルオープンする際にフードコートを併設し、これを雑誌社「Time Out（タイムアウト）」とリスボン市が共同プロジェクトとして運営している。

リベイラ市場入口

1968年にロンドンで創刊されたタイムアウト誌は、「シティガイド」として現在では世界35か国、40都市で発刊されており、都市に関して様々なトピックスを取り上げつつ、それをランキング形式で随時発表するなど、都市密着型の「シティガイド」である。

都市の情報を様々な角度から集めているタイムアウト誌の参画により、寂れていた古い市場がリスボンでも有数の市民の憩いの場および観光スポットに改修され、地域活性化にも貢献している。

巨大な倉庫のような空間の中心にはビールやワインなどを注文できるバーカウンターが配置されており、洒落たテーブルと椅子が室内に500席、テラスに250席ほど用意されている。

席を取り囲むように独立店舗が配置されており、ポルトガル料理はもちろんのこと、アジア料理やデザートなど幅広い料理を楽しむことができる。

これらの店のランキングや新メニューなどをタイムアウト誌に掲載する、店舗の入替えをコーディネートするなど、様々な仕掛けにより、常に来場者を飽きさせない運営が行われているのではないかと思った。

リベイラ市場の果物屋さん

魚屋さん

フードコートのピザ屋さん

リスボン　リベイラ市場　フードコート

スペイン　マドリード　サン・ミゲル市場

1916年に生鮮食品卸売市場としてオープンし、2009年にマドリード初のガストロノミー（食通）市場として生まれ変わり、スペイン各地からイベリコ豚やチーズなどの最高級の食材やワインが、30の固定店舗と移動式の３つのスタンドで販売されている。

シーフード・生ハム・寿司などのテーマ別の店から買い集めた食材とお酒を、テーブルスペースなどで飲食することもできる。

ポルトガルの「リベイラ市場」と同様に、市場と料理・酒の専門店を持つフードコートとの複合施設となっており、市民の憩いの場および観光スポットとして大変賑わっている。

サンミゲール市場外観

サンミゲル市場　生ハム屋さん

サンミゲル市場フードコート

スペイン　マドリード　サン・ジュゼップ市場

1835年に焼き討ちにあったサン・ジュゼップ修道院の跡地が、修道院廃止令によって当局に没収され、屋根を持つ広場となり、1840年から幾度かの建設計画の変更により1853年に完成した。

青果・精肉・鮮魚・調味料・乾物・乳製品・菓子類など多様な品揃えの市場で、市民とレストランに新鮮な食材を供給している。

アラブ首長国連邦　ドバイ　スパイス・スーク

スークとは、アラブ人の文化として古来より続く青空市場を意味する。全長140mのアーケード商店街で、香草・ナッツ・薬草や香辛料などを売る店が軒を連ねており、ストールなどを扱う衣料品店もある。

中近東の香辛料貿易は紀元前3,000年頃に遡る歴史があるが、ドバイのスパイス・スークが形成されたのは1850年頃といわれており、商品購入時の価格交渉を楽しみに訪れる観光客も多いようだ。

アラブ首長国連邦　ドバイ　ゴールド・スーク

1940年頃からインドやイランから来た商人が、この地区に金を扱う店を開いたことが起源とされている。スークの中心部は全長約270mのアーケード付きの歩行者専用道路で、道路の両側に多くの宝飾店が軒を連ねており、展示されている金の総量は10ｔとも25ｔとも言われている。

また、金が世界一安いとも言われているが、税金がかからない、加工代が安い、価格交渉が可能という３点が理由のようだ。18～22金を中心にプラチナやダイヤモンドなども扱っており、さらには金の自動販売機まであり、どこを見ても煌びやかな市場だった。

オールド・スーク店内

ゴールド・スーク

■　【所　感】欧州ローカル便・空の旅

～デュッセルドルフ～リスボン～マドリード～

新　山　　創
㈱中国新聞社
経済部記者

10月24日（水）デュッセルドルフ→リスボン（エアバスＡ320）

ドイツ有数の経済都市デュッセルドルフから、ポルトガルの首都リスボンまではドイツの航空会社ユーロウイングスで移動した。

デュッセルドルフ空港で２、３人ずつ一緒に搭乗手続きをした後、保安検査へ向かう。検査では陽気な職員マークさんが日本語で話し掛けてきた。「あなたは液体を持っていますか」「はじめまして、問題ありません」。同友会メンバーと日本語で話し込み、荷物用のトレイがレーンにたまっていく。同僚から「早く片付けて」と怒られるマークさん。苦笑いしながらおじぎで見送ってくれた。

デュッセルドルフ空港

ユーロウイングスは格安航空会社（LCC）に位置付けられる。到着した機体を見て「小さい」との声が上がる。機内に入ると１列当たり６人（３人×３人）分の椅子が30列ある。計180人乗り。テレ

ビや音楽のサービスはない。椅子の脚は細くクッション性に乏しい。経費を抑えて人を多く乗せるためか、かなりシンプルで窮屈な造りとなっている。LCCながら水とパンの軽食は出た。

約３時間のフライトを経て窓の外を見る。眼下に赤い屋根の家が並び、ドイツと違う風景が広がる。着陸後、欧州連合（EU）内の移動は入国審査がなくパスポートを見せなくてよいと知った。パスポートのスタンプが増えないのは残念だが、スムーズな入国に複数の国が政治と経済でつながる強みを感じた。

デュッセルドルフ空港保安検査　左がマークさん

10月26日（金）リスボン→マドリード（エアバスA320）

リスボンからスペインの首都マドリードへの移動はポルトガル国営のTAPポルトガル航空を利用した。

リスボン空港の搭乗手続きは自動化されていた。おそるおそる端末を触る。荷物の数を入力してパスポートをかざす。名前を読み込み搭乗券が発券される。荷物のテープも自分で張ってコンベヤーに乗せる。40人ほどいる乗客に対して手伝いの係員は２人のみ。メンバーから「海外も人手不足か」「将来はスマホと顔認証だけで乗れるようになる」との意見や予測が出た。

ユーロウィングス機内

搭乗までは時間がかかった。バスで空港内を移動後にしばらく車内で待ち、タラップを登った。機体はドイツからの移動と同じ型で180人乗り。約１時間15分のフライトでスペイン入りした。距離は広島 ― 東京間より短い。平日の便ながら満席で、ここでも欧州の国家間の近さを感じた。メンバーからは「国営のわりにはサービスや機体の運用がけっこう適当だ」と厳しい声があったことも記しておく。

表題のルートからは外れるが、日本からドバイへの出国と帰国はエミレーツ航空を利用した。２階建ての機体A380に搭乗する機会も得た。乗務員の赤い帽子に白いベール、砂漠を連想させるベージュの制服は一目で異国を印象付ける。各座席の画面は大きく映画も充実していた。赤ん坊の泣き声や頻繁に席の交代を求める外国人などエコノミークラスらしさはありつつも、長時間のフライトが楽しく快適に感じられた。

ユーロウィングス機体

リスボン空港 自動チェックイン機

ポルトガル航空機　垂直尾翼

おわりに

広島経済同友会
欧州経済視察団
副団長　木　原　慎　二
（㈱中国新聞社　取締役）

欧州視察の主な目的は、ものづくり革新を進める企業や産官学の取り組みに触れ、創業支援の在り方を学ぶこと。さらにはMICE（マイス）やインバウンド誘致の最前線をみて、地域・観光振興のヒントを探ることだった。そして最初の訪問地であるドイツのデュッセルドルフで巨大なメッセ（見本市）施設を訪問し、カルチャーショックに近い感覚を覚えた。

施設を運営していたのは、市が半分を出資する企業のメッセデュッセルドルフ。展示面積は約30万㎡で、東京ビッグサイトと幕張メッセの合計面積を上回る規模である。そこでミヒャエル・デーゲン取締役は、この施設運営の成功要因として「国際性」を強調した。海外75カ所に現地事務所を開設して139カ国で誘致活動を展開中。機械系メッセを開けば、国外の出展者と来場者が７割を占めるという。

欧州という海外交流を促進しやすい地理的条件を差し引いても、現状の日本ではとてもかなわないビジネス規模であることは容易に想像できた。データが裏付ける。メッセ会社の国際比較（2016年売り上げ）で、メッセデュッセルドルフは世界第5位。一方で日本の会社はベスト10に1社も入っていなかった。ちなみにデュッセルドルフの人口は約60万人。広島市のほぼ半数である。日本の国際競争力の現実の一端を突きつけられた気がした。

ドイツでは今、国が製造業のデジタル化「インダストリー4.0（第四次産業革命）」を主導している。背景には少子高齢化による労働力の減少、グローバル化への危機感があるといわれる。産業の国際競争力を高める国策だ。具体策の柱の一つがスタートアップ企業を育成する創業支援である。

視察では、デュッセルドルフでIoT（モノのインターネット）の試作品を作っている「IOXラボ」を訪ねたほか、同じビルにある創業支援の拠点「デジハブ」でブリーフィングを受けた。デジハブは、州が50％、市が25％、残りを民間が出資する組織だった。ドイツ以外では、スペインのマドリード郊外で、羽根のない風力発電設備を開発している企業「ボルテックス」でデモを見学した。これら一連の見学で強く感じたのは、ECを含めた国や自治体の徹底的な支援と、産学官が一体となって創業支援に取り組む風土である。ドイツのジェトロによると、インダストリー4.0では国や経済界、大手企業に加え、労働組合も参加し、ドイツの総力を結集しようとしている。国全体で国際競争を勝ち抜くことを最優先し、各企業が開発した独自技術や製品の情報を国内で共有することもいとわないだという。

日本や広島の現状と重ね合わせたとき、私たちが直面する「将来へ向け、国際競争の波に乗り遅れているのではないか」という大きすぎる課題が浮き彫りになった。

また、今回の視察ではスペインやポルトガル、ドバイの市場や美術館、世界遺産なども積極的に回り、現地の暮らしや文化、観光に触れた。視察内容に多様さが出たと思う。2017年のアジア視察と同じく、スペイン、ポルトガルの日本大使館を訪問し、大使と懇親の場を持てたことは、現地の生の情報を得るうえでとても意義深かった。

最後に11日間に及ぶ視察が無事に終わったことが、国際委員長としては何よりうれしい。多大な協力をいただいた企業や団体、個人のみなさんにあらためて感謝の意を表したい。ありがとうございました。

視察写真集

カサ・ミラ前にて

グエル公園にて記念撮影

スペイン広場　ドン・キホーテと従者サンチョ像

ドンキホーテ銅像をバックに　スペイン広場

マドリード王宮をバックに